〈報告〉記録——
Throwing Lifelines across Borderlines:
A Community Symposium on Critical Nikkei Studies

廣岡　浄進*

去る2022年３月３日から５日にかけて、サンフランシスコ州立大学（San Francisco State University、以下SFSU）において、標記シンポジウム「Throwing Lifelines across Borderlines: A Community Symposium on Critical Nikkei Studies」が開催された。本企画は、サンフランシスコ州立大学エジソン・ウノ日系・ウチナンチュ研究所（Edison Uno Institute for Nikkei and Uchinanchu Studies）と大阪市立大学人権問題研究センターとの共催で、さらに科研費研究「社会運動における生存権・生存思想の影響とその射程に関する基礎的研究」（A Basic Research on the Influence of Right to Life and its Philosophy in Social Movements）（21H03702、研究代表者：友常勉）も共催に加わり、後述する映画『主戦場』上映会については会場の責任者であるKyle Nagatomo氏の無償協力をいただいた。

本記録を書いている廣岡は、2021年10月から2022年９月までの予定で、科研費の国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））「日系アメリカ移民をめぐるトランスナショナルな歴史経験の重層性に関する文化交流史」（19KK0297）を交付されてサンフランシスコ州立大学に訪問研究者として受けいれていただき、在外研究に従事している。サンフランシスコ州立大学エスニックスタディズ学部（College of Ethnic Studies）とは、同和問題研究室が1997年に学術交流協定を結んでおり、2000年に同和問題研究室から人権問題研究センターへと改組後も2004年までにかけて毎年相互訪問を持ってきた。2018年度からこの交流を再活性化させようとし、協定の更新を提案したところ、当時とは事情が変わって部局間協定を作らなくなったので大学間協定を結ぶ必要があるとの回答を得て、種々調整の上、2021年度に双方の学長が協定書への署名を交換した。

エスニック・スタディズ学部は、1968年から69年にかけての黒人学生組合や第三世界連帯などの学生運動や教職員有志、さらにベイエリア（サンフランシスコおよび近郊地域）のコミュニティで組織された、構造化された差別にたいする抵抗としてのストライキにおいて提起された要求をうけて、1969年秋に設置された。この歴史は、その時期においても、同和問題研究室の設置された経緯と、きわめてよく似ている。なお、同大学は、State Universityとあるように、カリフォルニア州立の大学である。ウォールストリートジャーナル紙の報道では、2021年版の大学「多様性」指標で全米トップ５にランキングされており、学内には#BlackLivesMatterのメッセージに連帯する旗やステッカーがそこかしこに見られる。

エジソン・ウノ研究所は、同学部のアジア系アメリカ人研究学科（AAS ／ Asian American Studies Department）の日系研究関係教員で維持されており、ウェスリー巌・上運天（Wesley Iwao Ueunten）教授が所長である。彼は沖縄県からのディアスポラ移民、また沖縄近現代史とくに沖縄の軍事化と抵抗闘争

を研究しており、サンフランシスコ沖縄県人会の副会長でもある。本シンポジウムは、彼が大学院ゼミの拡大版である金曜会（註）で提案し、このオンライン定例研究会参加者およびエジソン・ウノ研究所関係者を中心に組織された。期せずして、両大学間の協定署名交換後、これまでの蓄積に立脚して学術交流の先陣を切る格好となった。

筆者は、共催の窓口となり、また大阪市立大学の経費執行という事情もあるので、記録を兼ねて、ここに報告するものである。なお、シンポジウムは対面とオンラインとのハイブリッド開催となったが、時差のため参加が困難であった大阪市立大学人権問題研究センター関係者向けに録画をおこなった。また、言語面での平等性（Language Justice）の観点から、完全ではないものの通訳を入れた。

タイトルは、あえて複数の意味を持たせているところがあるので、筆者の英語力の問題も手伝って、すんなりと日本語にならないのだが、水難事故のときに暗闇の中にむけて救命具を投げるように、さまざまな分断線を越えて、またむしろ自分たちが分断線にまたがっているという現実を浮き彫りにする、「日系」コミュニティの中にある分断線を可視化しつつ議論をつないでいくための実践、批判的であることはもちろん、かつコミュニティに立脚しつつ、暴力が現に作動しているところを照射してそこに有効に介入しうるような「日系」研究あるいは「日系」論とは何か、それをアーティストやアクティビストの実践報告を交えながら討議したいという問題意識である。英語の呼びかけ文は別紙フライヤーを参照いただきたい。また英文での告知サイトURLもそこに記載している。

プログラムは当初３月３日と４日の両日午後（アメリカ太平洋時間である。日本時間では、同じく４日と５日の早朝６時から）として準備していたが、最終的には５日の夕方に番外企画とレセプションを別会場で持つことになり、３日間の開催となった。とくに初日のオンライン参加者は60名を超えて、告知期間が短かったにもかかわらず主催者の予想を上回る盛況をみた。ちなみに会場の教室は感染症対策のため最大60名とされていたそうである。以下、プログラムに沿って、簡単に報告内容を紹介したい。なお、敬称は省略する。報告題目は廣岡による暫定訳である。

第１日は、Scott Oshiro（スタンフォード大学大学院生）のフルート、Francis Wong（Asian American Department講師でジャズ演奏家、AsianImprovaRts）のサックス、Wesley Ueuntenの三線によるOWUバンドの琉球歌謡の生演奏で幕を開け、上運天教授の開会挨拶後、オンラインでカナダ在住の作家Sho Yamagushikuによる、大地への言祝ぎの詩の朗読をいただいた。

第１セッションは「社会運動と批判的かつ意義のある日系研究」として、上原こずえ（東京外国語大学講師）「Kaho'owale、喜瀬武原、金武湾――アメリカ軍帝国主義にたいするトランスパシフィックな連帯にむけて」、スコット槌谷（カリフォルニア大学デイビスPhD Candidate、美術家）「金槌と雉――批判的日系研究をめぐる問題提起」を持った。上原のオンライン報告は自身のハワイ留学経験を通じて1970年代ハワイの島嶼における軍事利用への抵抗闘争が同時代の沖縄の反戦反基地闘争とつながっていたという発見から出発しつつ今日的な連帯の可能性を模索する。ツチタニ報告は、本シンポジウムの基調ともいえる多岐にわたる示唆に富んだ内容であったが、とりわけ北原恵に「社会に介入するゲリラアート」（『インパクション』178、2011年）として日本にも紹介された自身の美術活動において、「日系」表象が

いかに資本主義的、軍事主義的、帝国主義的に文脈化されているのかをパロディ・アーツとして告発してきた自作の紹介は強い印象を与えた。

第２セッションは、「部落出身移民研究」として、友常勉（東京外国語大学教授）「操作された共同体――日系人強制収容キャンプと部落出身移民」、廣岡浄進「アメリカおよびハワイにおける部落出身移民への差別――戦時強制収容を中心に」であった。友常と廣岡は科研費による共同研究で部落出身アメリカ移民の足跡を探究してきた関係であり、友常は半年間のサバティカル取得でサンフランシスコ州立大学に現地合流していた。友常は第二次世界大戦中の日系人強制収容がナチスドイツの強制収容政策と連続性を有していると指摘した上で、米軍史料で部落出身だと名指しされている日系人弁護士の経験を通じて、WRA（戦時転住局――日系人キャンプの運営にあたるために設置された）や軍が日系人団体JACLをどのように利用したのかが明らかにされねばならないと指摘した。筆者は新刊なった『講座近現代日本の部落問題』第１巻所収論文で利用した史料を紹介しつつ、WRAによる日系人調査が部落差別に強い関心を示していること、これが戦後の日本国憲法制定時のGHQ草案につながってくる可能性を指摘しつつ、その文脈を解明する意義を説いた。オンラインアーカイブでOCRスキャン情報（ただし機械による判読の誤りは修正されていないようだが）が埋めこまれた画像が公開されており、そこからこれだけの史料が発掘されたという点で、切り抜き画像ではあるが史料のもつ迫真性は、廣岡の英語の拙さにもかかわらず、深い印象を与えたようである。

第３セッションは「太平洋をまたいだ共同闘争」として、在日コリアンとして生まれ育ち在米の金美穂を司会兼通訳として、沖縄在住の芸術家として知られる金城実、槽谷晶、兵庫県在住で部落解放運動の活動家の岸本真奈美の４名による３か所をオンラインでつないだリレートークであった。金らは強制収容キャンプへのスタディツアーの活動を蓄積しており、現場を訪問することでさまざまな記憶が語られるという体験を重ねている。かれらは「被差別日系連帯」を提唱し、ここでいう「日系」は血筋の系譜ではなく、日本に関わりを持つという意味であると述べて、この日で（日本時間では前日）全国水平社創立大会で朗読されてから百年を迎えた水平社宣言の意義、金城が大阪で学校教員をしていた当時の体験から語られる重みのあることばも、オンラインでも響くものがあった。

初日の締めくくりは、ハワイからのオンライン参加のDr. R. Māpuanapaia'a'ala Shizuko Hayashi-Simplicianoによる、アイヌ系アメリカ人としての活動Katanaのヒップホップ音楽によるビデオパフォーマンスであった。リレートークへの応答を期待されたが、準備された内容となったようで、その点はやや肩すかしとなったところは否めなかった。

２日目の開会は、AAS学科長Mai-Nhung Le教授による挨拶で始められた。彼女はベトナム系で、公衆衛生の学位を持っている。セクシャルなサービスワークに従事している移民女性の調査と、同時に保健衛生の情報提供やコミュニティに基盤を置いた活動の組織化に取り組んでいる実践家でもある。そして、前日にも登壇いただいたフランシス・ウォンのサックスとスコット・オーシロのフルートによる炭坑節のジャズ調アレンジでかざられた。

第１セッションは、座談会「日本人あるいは日系アメリカ人らしくふるまう、ないしは演じることに

ついて」としてSFSU修士課程のTroy Kondo「日系アメリカ人のアイデンティティ・ポリティクス」、Kei Terauchi「演じることでサービス業務を解放する――日本料理店におけるオリエンタリズムに介入する」と題する小報告と、Scott TsuchitaniおよびWesley Ueuntenが聞き役となって、「日系らしさ」をめぐる権力性が議論された。トロイは日系５世の立場から日系コミュニティにおける「純血」言説を批判的にとらえかえそうとし、日系人総体としての加害性という視点から、近年議論が提起されているSettler Colonialismつまり日系をふくむアジア系の移民は構造としてのアメリカの植民地主義、つまり先住民への暴力を消去する権力作用に加担してしまうという問題意識から先住民のコミュニティ活動との連携が進みつつある情況を参照する。ケイはミシュランガイドに星いくつで掲載されるような格のアメリカおよび日本でのレストランでの合計17年の就労経験から、とくに和食店でジェンダー化された「日本らしさ」が要求されると述べ、そこにアメリカの人種化された資本主義の階層構造をみてとるるとともに、そこからどう自由になることができるかを探ろうとした。ここでのperformingとは、ジュディス・バトラーの議論が参照されているように思われた。

第２セッションは、行為の政治性という設定で、大林由季（SFSU講師、カリフォルニア大学サンタクルーズPhD Candidate）「忘却を記憶する――広島原爆乙女をめぐるアメリカにおける核兵器利用という暴力の隠蔽」、熊澤真沙歩（東京外国語大学博士後期課程）「1920年代30年代の浅草演芸――大衆芸能における国籍・階級・時間の超越」、高橋侑里（同志社大学博士後期課程）「美術労働者としてのアジア系アメリカ人映画制作／上映運動」が用意された。大林報告は渡米治療した被爆少女派遣団「原爆乙女」（Hiroshima Maiden Project）をめぐるアメリカでの渡米当時の報道を検証し、「乙女」たちの証言を匿名化することでアメリカの戦争犯罪という加害性を不問にする権力が作用したと指弾する。のこり２報告は略す。

第３セッションは「日系の語りに批判的につなげる」と題したパネルディスカッションで、初日にパフォーマンスを披露したショー・ヤマグシクが問題提起と司会進行をつとめ、同じくマープアナパイアアアラ＝シズコ・ハヤシ＝シンプリチアノ博士、さらにTomoki Birkett（コロンビア大学博士課程）が、複数のアイデンティティをもつ「日系」のありかたについて、ラディカルな現状介入のための対話を試みた。

総合討論は、友常勉が総括的な整理をおこない、それをうけて会場でコミュニティの活動実踐と学術研究とがどのように結びつき、相互に活性化できるかという意見交換がおこなわれた。筆者もマイクを向けられ、当センターの教育研究活動がさまざまな現場での実踐とつながりながら進められていると取り組みを紹介した。

同夜、映画『主戦場』の上映会とMiki Dezaki監督との意見交換会が、学内のホールに会場を移して開催された。周知のようにこの映画は日本軍慰安婦にされた女性たちを記憶する少女像と老女像のモニュメントがサンフランシスコの公園の一角に建てられた際の論争を発端とする映画で、こうした情況を「歴史戦」だと位置づけてアメリカ世論への介入を「主戦場」だと位置づける日本の右派論壇や人気ユーチューバー、またその仕掛け人たちがインタビューを受け、日本軍慰安婦問題に向きあってその解明に努めてきた研究者たちのインタビューと突きあわせる構成になっている。公開後に右派言論の一部出演者が訴

訟に出たが、先日地裁判決が出て監督側が勝訴した。アメリカでは遠隔授業の教材として視聴権を大学図書館で購入する動きがあり、日本でもいくつかの大学で上映会が実施されているとのことであった。４月からは大学統合で新大学「大阪公立大学」になるが、本学でも監督を招いての上映会が開催されてもよいのではないだろうか。

大阪市は、この少女像の設置をめぐって2015年当時の橋下徹市長が再三その設置に反対する旨の書簡を送付して姉妹都市訪問を中止し、あげくに後任の吉村市長（橋下市長の後継として指名され大阪維新の会から立候補した。その後大阪府知事に転じている。）が2018年10月２日付で姉妹都市提携の解消を通告した。ちなみにサンフランシスコ市側は、今も大阪市は姉妹都市であるとの公式見解を維持している。

３日目、３月５日の夕方には、サンフランシスコ市の近郊都市オークランドのコミュニティ活動のための文化施設Eastside Cultural Centerにて、NAKA Dance TheaterとMarshall Trammellによる制作中の新作Kazuo Ishikawa（仮題）の試演とレセプション（軽食つきの懇親会）が対面で持たれた。NAKAは、メキシコ出身のJosé Ome Navarrete Mazatlと日系のDebby Kajiyamaとのユニットでダンスを主体としたワークショップ活動などに取り組んでおり、マーシャルはアフリカ系の音楽活動家である。ともに、オークランドを拠点に、コミュニティに関わる文化活動を重ねている。

作品は当初シンポジウムでの上演が構想されたが、時間や空間の制約があるため、いわば番外企画として、場所をNAKAの活動拠点であるオークランドのイーストサイド文化センターに移して披露された。狭山事件で逮捕された石川一雄さんとその妻の早智子さんを、岸本真奈美さんとともに訪問した際の聞きとりに題材をとった無言ダンスである。部落差別による冤罪事件として知られ、戦後大きな狭山差別裁判糾弾闘争が展開されてきたが、石川一雄さんは今なお刑事司法上は仮釈放の地位に置かれており、再審請求中である。現下のアメリカで提起されている#BlackLivesMatterが警察や司法の構造に埋めこまれた人種的プロファイリング（偏見）を問題視し、警察解体を掲げていることからも、アメリカの今日的な文脈と共振することがうかがわれる。

上演後の短い解説という形で筆者も手伝うことができたのは光栄であった。

以上の記述で、３日間にわたる豊富な議論を紹介するには十分とは思われないが、ひとまずの記録としておきたい。筆者らの共同研究については、中間報告の場が与えられたことに感謝するとともに、日系コミュニティへの発信の機会ともなり、今後の展開につながる可能性をひろげていただいた。シンポジウム全体としても、一石を投じるという役割を果たすことができたのではないだろうか。最後に、改めて、関係諸氏への感謝をお伝えする次第である。（2022年３月12日）

＊人権問題研究センター准教授

【註】この名称は、かつて上運天教授が同志社大学訪問中に参加した、グローバルスタディズ研究科の冨山一郎教授（沖縄近現代史）が主宰する「火曜会」に着想を拝借している。筆者は阪大日本学で火曜会の発足に立ち会っているが、これは大学の制度としての大学院ゼミに重ねながら、学外の研究者にも開かれた討議の空間を作る取り組みである。